

偶然は、必然的にやってくる

田代 和美

その1 本誌の四月号に、大人がお膳立てをすることに歯がゆい思いをしているように見える子どもものことを書いた。何か自分の力でやりたい。でも日々の生活の中ではやらされることばかりと感して、もやもやしていたMは、もやもやして生活したまま、十一歳の誕生日を迎えようとしていた。誕生日プレゼントに欲しい物は特にない。この欲しい物がないということ自体が今の子ども達をつまらなさを象徴しているのだろうか、ここではそれはそれとして置いておく。欲しいものは実はあつて、でも物ではなく犬である。小さい頃から生き物が大好きで、とにかく様々な生き物が家の中に持ち込まれてきた。しかし喘息の持病がある妹の誕生で、ハムスターも里子に出されてしまった。犬以外には、欲し



い物はないというのが本当のところであった。こちらとしてもいらぬ物をプレゼントしても仕方ないなあと思いつきながら「誕生日プレゼントに目覚まし時計買ってあげようか」と何気なく思いつきで言った。以前に怪獣ブースカの目覚まし時計を欲しがっていたのを思い出していたのである。

子ども達と一緒に時計屋に行ってみると、ブースカの目覚ましはなかったが、歌を歌ったり、話をしたり様々な目覚まし時計があり、ひとつひとつ鳴らしてみても、大笑いだった。そんな中で一番受けたのが、志村けんのパカ殿の目覚ましで、「アイーン、アイーン、アイーン、アイーン」と言う声が出て、止めると「怒っちゃやーよ」と言うのである。変なのと言わんばかりの物だが、子ども達には大受けだった。本人は「いらぬ」と言っていたが、結局その変な目覚まし時計を、誕生日プレゼントした。Mは「いらぬと言って言ったのにー」と嬉しいんだか何だか分からない反応だった。むしろ妹の方が喜んでいた。

明日から起こさないという意味で目覚まし時計をプレゼントしたのではない。そういう言葉も一度も言っていない。しかし次の日からその「アイーン、アイーン」で自分で起きる一日が始まるようになった。三日坊主かなと思っていたのが、大した音量でもないのに、連日自分で起きてくるようになった。しかし、本人は毎日、ブーブー文句を言っていた。「あの声を聞きたくないから、早く目が覚めちゃう」とか、「夜中に何度も目が覚めて眠れない」とか、「寝不足だ」とか。「そーう、大変ねえ」と、そのことに関してはあまりまともに対応していなかった。本当に寝不足だったら見ていて分かるだろうと思っていた



からだ。それにこちらが命令した訳ではない。プレゼントに買ったという事実がそれを命令したことになるという解釈も成り立つが、そんなに素直に親の命令を聞く子どもではない。とにかくそんな文句を言う日々が二週間くらい続いただろうか、しかしそれもいつのまにか言わなくなった。

本人にとってはつらい日々だったのだろう。実際に眠っているかいないかはともかくとして、起きるということと一緒に眠るということ自体が、大きなテーマになっていた日々だったのだろう。でもそんな日々の中で、大きな変化が起きていた。自分で起きるということを自分に課してから、早く寝なくちゃという意識が働き始めた。それまでは、何をやるにも気力がないという感じで、寝る時間になってから宿題を始めたりしてずるずると寝るのも遅くなり、「早く寝なさい」とこちらが言わない日がなかった。しかし自分で起きることが始点になると、何時には寝ようという逆算が始まる。その逆算が、一日の生活を自分で割り振ったり、コントロールする行為につながっていった。私は私で、それまでの日々では、だらだらとした姿を見ると命令や怒る言葉がどうしても口をついてしまっていたが、言わなくてすむようになっていた。そして自分の一日の生活を自分でコントロールしているという実感を持つことによって、Mは自分の生活の主人公になっていった。これは家を越えて学校の生活の中にも大きな影響を与えた。学校の日々が変わったわけではないが、やめようかなとかいつかいた部活動を、「ちょっと考えてやめないことにした」り、今まで溜まりに溜めていた学校のドリルをどんどん進めたり、積極的な動きをし始めたの



である。

誕生日のプレゼントに目覚まし時計を買ってあげようと思ったとき、こういう変化を全く想定していなかった。でも何で目覚ましを買ってあげようと思ったのだろう。何も言葉でくれるようなはつきりした意識はあのないときなかった。ただ直感的に思いついたという感じだった。でも後から考えてみると、文句を言っただけは自己嫌悪に陥ったり、それによって子ども共々悪循環にはまったりしながら過ごしていた日々の中で、子どものしんどさを感じ続け、自分もしんどくて、でもこうすればよいということも見つからずに、どこかに突破口はないかなあと探し求め続けていたのは事実である。そしてM自身が最も、何かのきっかけを求めていたのだろう。一言で言ってしまうえば機が熟していたのだろうが、タイミングが合うということには、そうそう出会えるものではない。

子どもが育つ過程の節目には、停滞や後退してしまうことに何度もぶつかると。そういう出口の見えないような中で、今、こういうことがしんどいんだろうなどと感じながら一緒に過ごすことそのものが大切なのではないかと思えるようになってきた。それをそのまま感じているだけでは意味がないのかもしれないが、でも一緒に過ごしている人間としては、きつと自分の中に様々な感情が湧いてきてそれを見つめなくてはならなかったり、それによって何かを投げかけたりも自然としてしまうだろう。そんな中で、あれっと思うような偶然的出来事が、事態の突破口になったりする。意識的にしたのではないという点では偶然的出来事なのだろうが、もやもやを共にしてなかったら決して生じなかった偶然なのだ



思うと、それは必然的なことに思えてくる。

その2 Mが犬を飼いたがっていたことを先に書いたが、これは長年の希望だった。

あまりに多くの家で飼っているので説得力はないが、ここでは犬は飼ってはならないことになっているということで、そして自分の身の回りのことができるようにならないと生き物の世話は出来ないという事でこの件は先延ばしにしてきた。それに妹の喘息のことも勿論あった。犬の話は毎日のように出て、こちらはこちらで勝手に、部屋をきれいに片づけ、言われなくても自分のことを自分でやるなど、Mには越えられそうにないと思うハードルを交換条件に出していた。

そして困ったことが生じた。自分で起きる生活を始めたMは、それまでこちらが越えられないと思っていたハードルを一つひとつ越えてしまったのだ。Kの喘息のことは未解決のままだったし、それはMも理解はしていたが。父親は、これはもう真剣に犬のことを考える必要があると感じて、Mと一緒に動き始めた。それまでも小さい頃からベツトショップが大好きでよく父親と行っていたが、今やインターネット上でも犬を売買しており、二人でいろいろと情報を集めていた。それはそれで楽しい時間だったようだ。しかしペット業界は、育児産業のようだ。お犬様々という感じである。そして何十万というお金で犬が売られている。その矛盾を感じ、またM自身、犬に関する本をいろいろ読んでいたこともあって、捨てられた犬を引き取るという方向に話は進んでいった。しかし、愛護団



体などで具体的に話を聞いてみると、そういう犬を育てることは難しく、初めて飼う人、子どもには勧められないということだった。話は振り出しに戻り、結局、梅雨の時期をKが乗り越えられたら、夏休みに柴の子犬を飼う約束になった。

ところが五月半ばの週末、買い物に出かけた駅前で動物実験に反対する団体がパネル展をしていて、私達は吸い寄せられるようにそこに行ってしまった。そしてそこには、里親を探しているという一匹の犬がいてしまった。数日前に保健所で殺されているはずの犬だった。お世辞にもかわいいとは言えない茶色に黒が混ざった犬で甲斐犬の血を引くの、「カイ君」と名付けられていた。私がい物をし、父親がKと遊んでいるその間ずっと、Mはカイ君の所にいた。しかしそれまでの経緯で、そういう犬を飼うことは難しいと言われていたため、後ろ髪を引かれながらも、募金をし、パンフレットをもらってそこを後にした。帰宅した後も翌朝も、Mは「カイ君、どうしたかなあ」とそればかりだった。実はそれは私も同じだった。「柴犬とカイ君どっちがいいの？」と聞いてはならないことを聞いてしまった。「そりゃあ、カイ君」。当然だ。その日、私はもらったパンフレットを手に、その団体の本部に電話をかけ、昨日会った人たちを探してもらっていた。里親が見つかっていることを祈りながら、かつ見つかっていなかったらどうするのだろうか、自分のやっていることは支離滅裂だと思いつつ。あの犬を見捨てて、お金で犬を買うという事は、Mに何を伝えるのだろうか。私が引かかっていたのはそのことだった。後に連絡がきて、やはり里親は見つかっていなかった。父親は私が連絡を取ることも見通して



いたようで「昨日連れて帰るのかなあと思ってた。Mらしい選択じゃないか」と当然のこのように言った。

様々な矛盾を抱えつつ、カイ君が我が家にやってきた。推定年齢三歳くらいの成犬だ。そして来て直ぐに、Kに噛みついた。怪我はなかったが、先制攻撃に不安が増大した。あ
のとき見たカイ君はあまりにおとなしく、難しさのかけらすら見られなかったのに。Mは
登校する前に散歩に行くため、我が家でもつとも早く起きる人になった。朝夕の散歩を一
日も欠かさずに行き続けている（朝は父親も起きれば一緒だが）。Mは一度咬まれ、破傷
風の予防接種を受けたが、その日も夕方何も事もなく散歩に行った。

カイ君との日々は楽しくて仕方ないようだったし、とてもなついてはいたのだが、段々
と言われていた難しさが表面化してきた。外で飼っているため、家族の者以外には番犬と
して吠えまくる。子どもも嫌いだ。犬の本能としては当たり前前だが、飼うとなると問
題になる。そして家族以外の人や犬に一度吠え始めると、本能のままになつてしまうよう
で、こちらの制止が効かない。制止すると飼い主にも牙をむき、父親も私も咬まれてい
る。おばあちゃんも靴の上からだだが、咬まれた。

何かが起きる度に、もうだめかなあとみんなで落胆する。何であの時カイ君に出会つて
しまったんだろうと後悔もしてしまう。団体の方に何度も電話で相談したり、犬を飼って
いる方々からもいろいろ教えてもらってきた。結局は子どもが飼い主であること自体、な
めてかかることになるから、家族全員で父親を群のリーダーとして飼い、自分がその中の



一番下という位置づけを徹底させなくてはならないのだそうだ。手放すか、徹底してしつけないおすか。Mは自分が主な餌い主でなくなる事自体、不本意であったようだが、でも手放すという選択はできなかった。Kも一人で近寄ることを禁じられているし、ほとんどさわったこともないのに「カイ君は、私の友達。いなくなったらイヤ」と主張した。ここまですて来て、それでも手放さないとすると父親は大変だ。責任重大である。はつきり言つて本能しかない状態になつた時のカイは怖い。人に向かつていかにないように短く綱を持つていて、何とか我慢させていても、我慢の限度を越えると「放せー」とばかりに噛みつこうとする。初めての時はしばらく震えが止まらなかつた。父親とて同じだという。生まれてからどんな生活をしてきた犬なのか、全く分からない。でも人間とよい関係を築いてきたとは到底思えない。大人になつてから、それを教えていくことがどんなに難しいかを痛感する。

でも手放す選択肢がなくなつたことで、父親ほどではないものの、私も腹が据わつてはきた。今までも対決してきたつもりではいたが、怖いとも思つていたし、もうだめかなあとか、違う所(があるかどうかは分からないが)で暮らした方がカイにとつて幸せなのではないかと迷いがあった。それがどこか伝わつていた様な気がするし、本当の対決になつてはいなかつたのだろう。でもそんなこと言つていられないとなると、牙をむく相手に「咬むんなら咬んでみなさい！」と向かつていけるようになってきた(怖いのは本当はまだ怖いのだが)。つい先日は、「放せー」と私の手を咬もうとしたカイが、伺い見るように



私の目を見ていた。時々、思春期の、特に男の子を持つ親の気分ってこんなものかもしれないと思うことがある。MやKがこの先迎えるであろう日々の予行演習のような気分でもある。

私は実は犬が好きじゃなかった。小さい頃、じゃれてきた犬に押し倒され、下敷きになってからは、特に大きな犬は怖かった。しかしMの影響で否応なしに身近な犬達ともかかわらざるを得ない状況になってはいた。そしてMを通していろいろ話を聞いてきた中で、絶対服従させる関係をつくることは、私にとって恐らくもつとも苦手だという予感があった。そういう関係を持つことを拒んでいる自分があった。自分の目指す子どもとの関係と矛盾する関係を作る自信はなかった。拒んだままだった方が楽だったろうが、偶然にもカイというともない犬がやって来たことよって、拒むことができなくなった。私には、"その1"のような偶然に立ち会う自信は少しはあるかもしれないが、"その2"のようなたじろがずに対決する自信がなかったのだろう。それを思うとカイとの出会いも偶然ではあったが、苦手ではありながら必要感も感じてきた関係を身に引き受けることは、自分にとって必然的にやってきたことのように思えてくる。自分の中の知らなかったもう一つの顔が見え始めていて、それは結構面白い。

(お茶の水女子大学)

